

二〇二四年一月八日

住職のほまち畑に秋茄子
柳川の水郷めぐる小春かな
トロッコの鉄路を埋む落葉かな
蔀戸の障子明かりに観世音
紅爆せて山路明るき檀の実
苔庭に万華をなせる散紅葉

なつき
千鶴
風民
うつき
むべ
明日香

二〇二四年一月七日

黄落の散りやむ間なき無音界
また同じ一匹らしき秋の蠅
胎の児に語りかけもす柚子湯かな

風民
うつき
康子

二〇二四年一月六日

館内に響くくさめやあれは夫
派手を着て若返りたる冬コート
目が合ひしナースの笑みの温かし
靴跡に象嵌めきし櫟の実

あひる
たか子
明日香
むべ

二〇二四年一月五日

石路咲いて家の中まで明るうす
河岸小春海鮮井に舌鼓
安産を願ひ腹帯干す小春
山門を潜るや否や照紅葉

うつき
せいじ
康子
山椒

二〇二四年一月四日

秋冷の高野山道石畳
民宿の客らも総出鱒引く
七五三裳裾はだけてスニーカー
反抗期銀杏落ち葉を蹴りあげて
目瞑ればみな走馬灯我白寿
お祓いを享くる本殿秋寂し

やよい
みきお
やよい
たか子
董雨
ぼんこ

二〇二四年一月三日

冬雲の割れて天使の梯子射す
名水に杖置く母に小鳥来る
一穢なき空の青さや文化の日
故郷の民謡に秋惜しみけり
雑炊でしめる二人の残り鍋

明日香
なつき
やよい
こすもす
もとこ

二〇二四年一月二日

木洩れ日を背ナに受けつつ落葉搔く
風ぐせに曲がりしままの小菊かな
仏手柑置きてしつらふ京町家
老い父の寝間に歳時記文化の日
雨の夜居間に炬燵の出でにけり

明日香
うつき
もとこ
康子
みきえ

毎日句会みのる選・二〇二四年一月一日